

3.1 石器

岩石を素材とするさまざまな道具。動物や植物を切ったり削ったり、刺したりする用途の他、砕いたり、磨ったりして加工する用途にも用いられる。石器を作るために、素材となる岩石を叩く石（叩き石）も石器である。

1) 石器の種類とつくられかた

石器を利器として用いる場合、ガラス質の岩石（西アジアの場合、フリントやチャート、黒曜石）を打ち割り（剥離）、得られる石片を利用することが一般的である（打製石器）。この時、打ち割られる石の素材が石核、剥離された石片が剥片と呼ばれる（図1）。これが最も基本的な石器製作の技術であるが、人類に獲得されたのは直立二足歩行より数百万年も遅れた（約250万年前のアフリカ）。道具となるのは剥片だけではなく、石核自体も道具としても用いられる。石核石器と一般に呼ばれるものである。礫の一部分のみに刃部が作られ、石核石器全体の形状は元の礫の形を残しているものは、礫器（あるいはチョッパー、チョッパー・チョッピング・ツール）と呼ばれる。このように、剥片と単純な礫器を主体とした石器技術は、西アジアの場合、下部旧石器時代のドマニシ遺跡（約180万年前）などで発見されており（図2）、いわゆる原人の骨が伴っていた（1.3参照）。

より時代が下ると、石核石器への加工の度合いが高くなり、その全体形状が整えられるようになる。その典型例として、ハンドアックスと呼ばれる石器がある。アーモンド形や楕円形などの平面形をして平たく、ほぼ全周に刃部が作り出されている。西アジアでは、下部旧石器時代のアシュール文化にみられる。その原初的形態は約140万年前のウベイディヤ遺跡でみられ、その後、次第に左右対称で薄くなる傾向がある（1.3参照）。もし、ハンドアックスが出土したホロン遺跡の約20万年前という年代が正しければ、西アジアでは120万年間にわたって使われ続

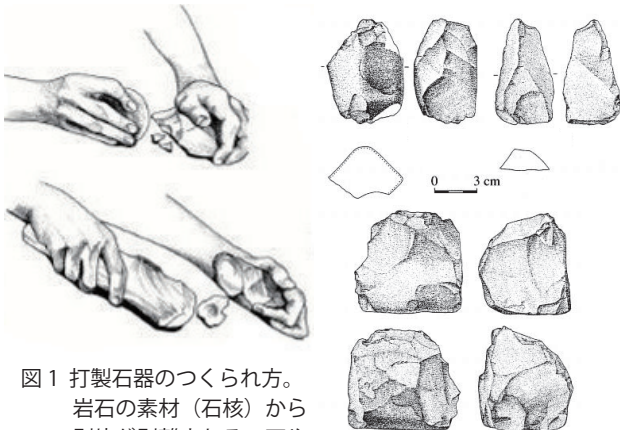


図1 打製石器のつくられ方。岩石の素材（石核）から剥片が剥離される。石や鹿角をハンマーとする。

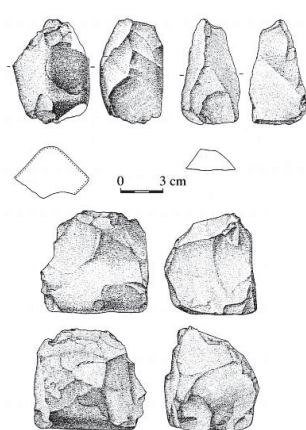


図2 ドマニシ遺跡の礫器と剥片 (Gabunia et al. 2001)

けた石器の種類ということになる。

アシュール文化期の終末頃から、石核のほうではなく、石から剥離される剥片の形態をコントロールする技術に重点が置かれ始める。この方法には2種類ある（図3）。1つは、剥片に細かな剥離を加えることによって変形させ、新たな形や刃部を作り出す方法である（二次加工）。西アジアのヤブルディアンという下部旧石器時代末の石器伝統では、分厚い剥片の縁辺に二次加工が加えられて作られた削器（スクレーパー）が特徴的である（1.3参照）。もう1つの方法は、石核の形を丁寧に整えることによって、剥片が剥離される前にその形状を用意する方法である。したがって、この方法によってうまく剥離された剥片には多くの二次加工を加える必要はなく、ほぼそのままの形で使用できる。この代表例が、西アジアの下部旧石器時代末から中部旧石器時代のあいだにみられるルヴァロワ技術である。この方法によって作られた剥片は縦長、楕円形、三角形の3種類に区別されることが多いが、その内の三角形は特にルヴァロワ・ポイントと呼ばれ、狩猟用の刺突具としても用いられたと考えられている（1.3参照）。

この2つの方法によって剥片の形を整える技術は、その後、西アジアでは青銅器時代までつづく石器技術の基本になる。異なるのは、どのような形態が作られるかである。約4.5万年前以降の上部旧石器時代には縦長の石刃とよばれる形態が多く作られるようになった。その内のアハマリアン文化では、先の尖った石刃が作られ、それにわずかの加工を加えるのみでエル＝ワド型尖頭器と呼ばれる刺突具が作られたのが特徴的である。終末期旧石器時代になると、剥片に二次加工を加える度合いが高くなり、組み合わせ道具の部品として利用された小型の石器（細石器）には、長方形、台形、三角形、半月形など多様な形態がみられる。さらに石器の形だけではなく、二次加工の方法自体も多様化し、マイクロビュラン技法とよばれる特殊な方法も現れた（1.4参照）。

新石器時代になっても、その前半は石刃製作技術が存続

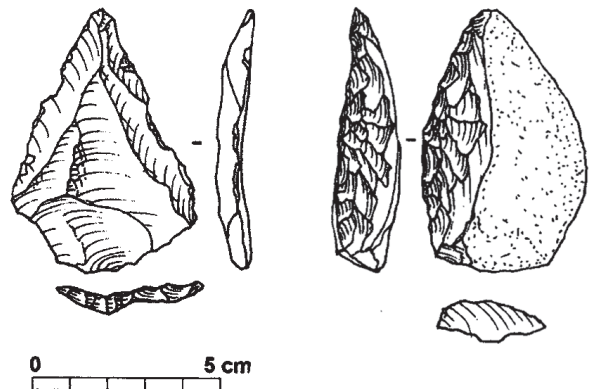


図3 異なる方法で作られた剥片の形 (Nishiaki et al. 2011) 左：ルヴァロワ・ポイント、右：ヤブルディアン・スクレーパー

し狩猟具や解体具が作られていた。その後、動物の家畜化が普及すると、新石器時代の後半期には石刃技術が一時衰退するが、銅石器時代の直前から再び復興し始める。この時の石刃は狩猟ではなく穀物収穫用の鎌刃の効率的量産を目的としており、青銅器時代におけるカナン石刃の専門的製作にいたる。

以上の打製石器とは区別して、磨製石器という種類がある。一般的には、食物を叩いたり磨ったりして加工する道具（図4）や、刃部を磨いた斧、石を磨いて作った容器（石製容器）などが含まれる。その素材には、玄武岩や石灰岩、砂岩、安山岩、フリントなどが用いられる。これらの岩石の形が既に用途に適している場合はそのまま使われることもあるが、変形が必要な場合は、粗割り、敲打、研磨などによって加工される。粗割りでは剥片が剥離されるので、その点では打製石器の製作と共通する。西アジアでは、終末期旧石器時代の中葉から新石器時代にかけて、穀物利用の増加とともに磨製石器が出土する遺跡数が増加する傾向があり、いわゆる農耕技術の発達を示す考古学的証拠として研究されている（1.5 参照）。

2) 石器を理解する視点

石器の形や機能は時代や地域ごとに多様であるが、それを総合させた大きな視点から何が分かるだろうか？

人類進化との関わり

人類進化の文化的側面について教えてくれる証拠の1つが石器である。猿人、原人、旧人、新人と一般に呼ばれるヒトの進化において、自然環境だけでなくヒトの行動や技術が果たした役割が大きかったと考えられている。西アジアでは、石器を獲得してアフリカからユーラシア大陸へはじめて人類が拡散した足跡をみるだけでなく、加速度的に変化していく石器文化（オールドワン文化、アシュールアン文化、レヴァント地方ムステリアンなど：1.3 参照）が、当時のヒトの生物学的進化段階（例えば、ホモ・エレクトゥス、ネアンデルタール人、新人）とどの

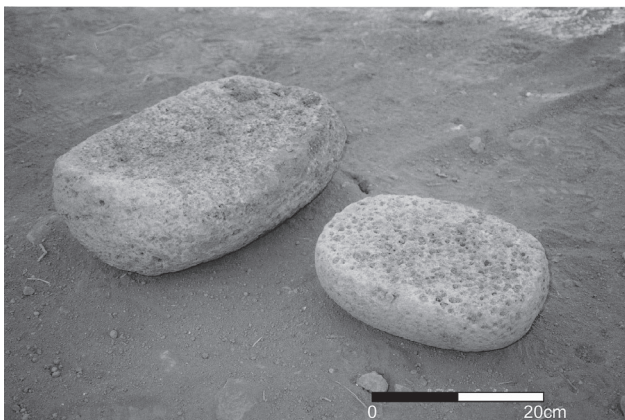


図4 穀物加工用の磨製石器（ヨルダン、ジクラブ渓谷、筆者撮影）磨石（右）を石皿（左）の上で前後に動かして製粉する

ような関わりがあったかについて調べることができる。

人間社会との関わり

石器は、それを作り使う個人が属する社会の産物である。西アジアの場合、狩猟採集から農耕牧畜への経済変化を示す証拠の1つにもなるだけでなく（1.5 参照）、それぞれの社会において伝達・学習される特定の石器の作り方や使われ方のパターンを同定することによって地域集団を同定したり、その社会関係を測る証拠にもなりうる。また、産地の限られた石器の素材（例えば新石器代の黒曜石）や専門的道具（例えば青銅器時代のカナン石刃やタビュラー・スクレーパー：1.8, 2.8 参照）が広い地域から見つかる場合、その流通を可能にした社会のシステムを知る手がかりともなる。

3) 石器を調べる方法

このように、過去のヒトや社会に関してさまざまなことを石器から知ることができるが、知りたいことによって石器を調べる方法は異なる。しかしながら、石器を調べる上では、その素材が何でどこから得られたのか、素材をどのように加工して石器を作ったのか、どのように用いられたのか、どこに捨てられたのかというように、石器の製作から使用、廃棄の過程のいずれかに焦点をあてて調べ、その結果として復元される人間行動（石材採取や製作技術、使用行為、廃棄物処理）に基づいて過去のヒトや社会を議論するのが一般的な方法である（図5）。

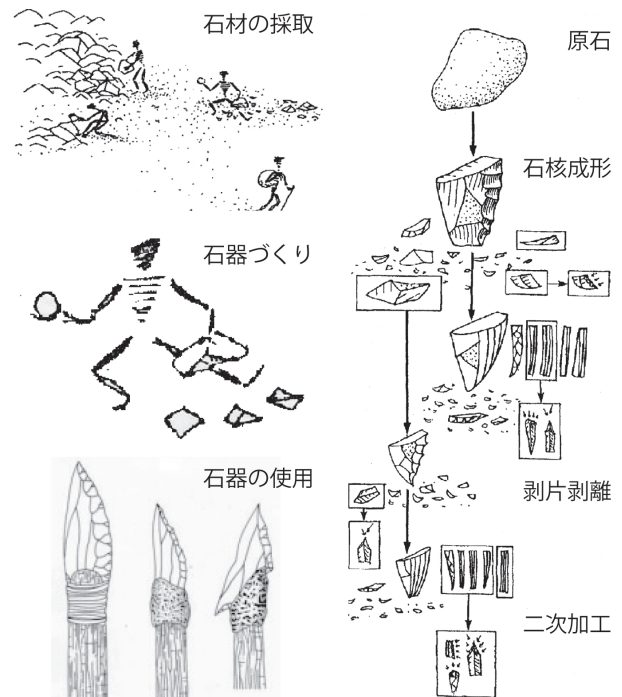


図5 石器の履歴 (Inizan et al. 1992 と University of Wollongong)

どの石器にも、その素材となる石材が人間に獲得され、成形され、使用されるまでの履歴がある。遺跡に残された石器から、これらの活動を復元することが、石器研究の方法の1つである。